

ムカシの競馬を読む

平成18年・函館競馬場
函館記念
優勝馬：エリモハリアー

© JRA



ムールを出し、日本のG1にその足跡を残した。現2歳世代にも30頭弱の「母の父ラムタラ」がいるので今後また活躍馬が出る可能性もある。

同じ20年前の7月から、「そういうえば、この頃毎年話題にのぼつてたな」という話。平成8年7月15日付の報知新聞から引用しよう。

「安田富がついにやった！」 3番人

最後に、いまから30年前昭和61年の7月。この月は月末になって、日本競馬史に残る開催が行われた。その開催は7月31日。よって紙面は翌日、8月1日からスポーツ二子のものを紹介しよう。

「4万観衆は日本で初のナイター競馬に酔いしれたら、世界で17番目

Brothersが帝王賞後にライヴをやつたときと似てるような気がするが、イベンターの集客、さらに投票行動への結びつけというのはなかなかに難しこういふのは、30年前もいまも変わらぬことか
もしれない。

第131回 10年・20年・30年前の7月



いまから10年前とすると、平成18年の7月。夏競馬中(いつ)で大レースは無く、写真も函館記念を使つていただくことにした。ちなみにこのときの函館記念は、「エリモハリアー3連覇の、真ん中の函館記念」である。

海外レースでは、ダンスインザムードがキヤッショコールマイル(G3)を勝つてゐる。いまはG3勝ちだとそれほど騒がれないだろうが、当時はまだ「海外での重賞勝ち」が特別なものであった。

キヤッショコールマイルはいまは無きハリウッドパーク競馬場で行われていた牡馬限定戦で、アメリカのG3にしては1着賞金40万ドルと比較的高額だった。というのもスボンサーが貸金業者のキヤッショコールだつたからで、日本でいえば「武富士杯」とか「プロミスS」のようなものだらうか。日本の公営競技では許されなさそうなスボンサーだが、ターゲットマーケティング

として正しいとしては正しいのかもしない。
日本と事情が違う海外の事件、
というと、イギリスではこんなよからぬ事件が起きていた。平成18年
7月5日付のサンスポから。
「日本でもおなじみの英国のトッヅ
ジヨツキー、キーレン・ファロンら11
人が、八百長の容疑でロンドンの警
察当局に起訴された(中略)アイ
ルランドのターフクラブは、ファロン
の同国での騎乗は可能としている
が、英國競馬では騎乗停止処分を
受けた。今週金曜に行われる公聴
会で証明の機会を与えられ、引き
続き英國で騎乗できるか判断され
る」
この八百長騒動については争つた
末に翌年暮れ無実となるのだが、
この記事の直後にフランスで騎乗し
たレース後の薬物検査で陽性反応
を示したり、さらに復帰後によ
り陽性などこの時期のファロンはだ
いぶ騒がしいことになっていた。

記事中の騒ぎになつた八百長問題は、ファロンというよりこの時期イギリスを悩ませた問題。ベットエクストエンジ(ある馬の勝ちに賭けた人)と負けに賭けたい人をマッチングするビジネス)の台頭により、人気馬で負けることが儲けに直結するようになつたことが問題の根本だ。いくら競馬先進国といっても、これだけは見習いたくない文化である。

さて、冒頭でレースのほうは地味だったと書いたこの月だが、セレクトセールではとつもなく派手なことが起きていた。12日付のサンスポから引用しよう。

「瞳に惚れたぜ、6億円だあ！ 北海道・苫小牧市のノーザンホースパークで開催中のサラブレッドの競り市『セレクトセール2006』で11日、国内史上最高となる6億円で当歳馬が落札された。G1馬を両親に持つ女の子で、当歳では世界レコードだ(後略)」

競馬ファンならば、この6億円馬についてはご記憶のことだろう。そして、競走馬としてはデビューで生きなかつたこともご存知だろう。未出走のまま繁殖に上がってから「ディナシー」と名前がつき、初仔のヴィルデホ以下3頭が既にデビューレコードで現1歳のクロフネ産駒は昨年のセレクトセールで1億円+税。今年のセレクトセール（当歳セツシン）にはノヴエリストの牡馬が上場される予定だ。

この年は高額馬受難の年で、当歳の価格3位も不出走。2位の馬は海外勢に買われたがアメリカで1戦して2008ドルの賞金を得たのみだった。復活した1歳セツシンの最高価格馬も中央未勝利（岩手2勝）で、競走馬というものの難しさを象徴する年であった。

統じていまから20年前、平成8年の7月。まずは11日付の日刊スポーツから引用しよう。

「種牡馬ラムタラの輸入交渉にあ

ムカシの競馬を読む



須田鷹雄

たつていたジエイエスと輸出するダルハムホールスタッフは、同スタッフで10日午後（日本時間11日未明）、売買契約を結び、輸入が正式に決まった。最終的な売買金額は30000万ドル（約33億円）。日本での種牡馬シンジケートは46億円になる見込み。今日11日、双方が同契約について発表する」難しいのは競走馬だけでなく種牡馬も同様で、このラムタラも大きな成功は得られなかつた。サンデーサイレンス旋風の吹き荒れる日本に来たというタイミングも悪かつた。

実はこのラムタラ、再輸出が決まつたのがいまから10年前の7月。買い戻し時の価格は24万ドルで、ダルハムホールスタッフに戻り、22歳で死亡するまで余生を送つた。

父としては成功できなかつたラムタラだが、母の父としてはヒルノダムールを出し、日本のG1にその足跡を残した。現2歳世代にも30頭弱の「母の父ラムタラ」がいるので、今後また活躍馬が出る可能性もある。

同じ20年前の7月から、「そういうえば、この頃毎年話題にのぼつてたな」という話。平成8年7月15日付の報知新聞から引用しよう。

「安田富がついにやつた！」 3番人

連覇を果たした。安田富男騎手は、昭和49年に小倉競馬場の小倉大賞典（ノボルトウコウ）で勝つと、以降、JRA史上初の全10競馬場での重賞制覇を成し遂げた。王手をかけてから9年越しの快挙だつた。

安田富男騎手の「9場目重賞制覇」は、ローテリーザハレーのタマソバキ記念で、昭和62年。そこから9年かかっていたし、年齢も年齢だけに達成ならずか……とファンもやきもきしていた中での達成だった。

全10場重賞制覇はその後、武豊騎手と藤田伸二騎手も達成しており、現在は横山典弘騎手なども騎手がリーチをかけた状況になっている。しかし、昔はいまより重賞の数も少なかつたし、関東・関西の隔たりも大きかった。時代背景や1人あたりの騎乗数を考えると、よく達成できたものだと思つ。

最後に、いまから30年前、昭和61年の7月。この月は月末になつて、日本競馬史に残る開催が行われた。その開催は7月31日。よつて紙面は翌日、8月1日からスピニチのものを紹介しよう。

「4万観衆は日本で初のナイトレース馬に酔いしれたら世界で17番目

華々しく開幕した(中略)ナイターは、初勝利は宮浦騎手騎乗のトミアルコが逃げ切つて快勝。『夜に強い男、宮浦』と同僚に冷やかされる一幕もあつたが、『とても走りやすい光る砂は足抜きがスムーズ』といふ。宮浦騎手は昼間のレースと全く違わない』と強調した

今まで、多くの地方競馬場でナイター開催が行われ、競輪やオートレースではミッドナイト開催も登場しているが、当時としてはナイターというのは画期的なことだった。

ちなみに、このナイター開幕日には早見優の「トランサート」が行われた。そこで、記事中には「なんくだりもある。『ア』の〇〇君(筆者注:記事では実名)は『優ちゃんの行くところならどうでも』でも行きますよ。馬券? まだ高校生ですからもちろん買つていません』と、ショヨーが終わるとナイターも見ずに引き揚げてこの話

……なにやら、三代目 J Soul Brothersが帝王賞後にライブをするが、イベントとその集客、さらに投票行動への結びつけというのはなかなかに難しいといつては、30年前もいまも変わらないことかかもしれない。